



特254  
237



始





納本

237

# キリスト者の生活

赤岩 榮 著

上原パンフレット第六篇

長崎書店刊行



特254  
237



著 榮 岩 赤  
活 生 の 者 ト ス リ キ

トツレフンハ原上

編 六 第

容 内

- 一、人間存在の謎
- 二、人間の被造性
- 三、人間の墮罪
- 四、墮罪よりの回復
- 五、神と人との宥和
- 六、義認と聖化
- 七、人間存在の目的

VI

行 刊 店 書 崎 長





## 序

上原バンフレット第六編「キリスト者の生活」に關して、私は多くの優れた著書を参考にすることが出来た。わけてもバルトの「キリスト者の生活について」「聖靈とキリスト者の生活」「福音と律法」ロマ書講解中の「倫理の問題」「社會に於けるキリスト者」「義認と聖化」は、本編の内容を決定的に規定してゐる。私はこれらの著書から、引用箇所を明らかにしないで、自由に本文の中に挿入した言葉の多くあることを告白しなければならない。而も私が敢てバルトの教説の解説に終始せずして、獨立に本文を構成した理由は、我々は日本人であつて、日本で生活してゐるといふ特殊な事情によるのである。恐らく彼處に於て既に論議し盡され、最早問題とならない事柄の中には、私たちにとつて新しい眞剣な課題として取上げられなければならないものも多々あるであらう。また逆に彼處で甚だ重大な事柄として取扱はれつゝある事實が、私たちにとつては關心の外に置かるべきものであることも少くないであらう。私たちは共に、あらゆる環境の特殊性を越えて、救主キリストの事實にキリスト者として關係してゐる。



併し、私たちはその關係する場所に於て異つてゐる。このことの中に、私は「キリスト者の生活」について多くの優れた著書が既に數多く刊行されてゐるにも拘らず、なほ本書を公にする意味を見出してゐるのである。

この第六編を刊行する以前に上原パンフレットは、日本基督上原教會の傍系的事業として、既に、「聖書に於ける神の言」「隠れていまし給ふ神」「神の言としてのイエス・キリスト」「聖靈」「イエス・キリストの教會」の五編を公にしてきた。併し、最近教會の仕事が多事を極め、出版事業に携はることの不可能を経験して、専門の書店に委託したいと願つてゐた時に際して長崎次郎氏が同氏の經營される基督教書店より上原パンフレットの出版を心よく引受けて下さつたことを、衷心より感謝するものである。かく各々の携はる分野に於て、微力ながら神の言の宣教に奉仕し得ることは、たゞ神の恩寵に外ならない。

一九三七・二・一七

代々木にて  
著者

## キリスト者の生活

赤岩 榮

### 一、人間存在の謎

一體キリスト者とは如何なるものであらうか。

社會に於けるキリスト者の位置は、それ自體特殊なものではない。彼がその見えざる根柢に於て、しかと把握されてゐる神の恩寵から離れて、彼自身だけを取出し觀察するならば、キリスト者も亦單なる人間である。彼は人間のあらゆる感性から全く解放されてゐる譯ではない。彼の心臓は、世の人と異るところなく鼓動し、彼の臟腑は世の人と同じく、肉慾に對する傾向をもち、また彼の脳髓は人間的な餘りに人間的なる動向に従つて思考し、且つ思辨してゐる。そこで私たちは先づ、キリスト者とは如何なるものであるかとの間に先立つて、一體人間とは如何なるものであるかとの問を發せざるを得ないのである。若しこの間に對して正しい決定的な答が可能であるならば、キリスト者は如何なるものであらうかとの問は、この答の中で解消



されてゐると見ても差支へないであらう。人間とは一體如何なるものであらうか。この舊い問、而も常に新しく私たちの側近くに影の如くつきまとつてゐる問が、私たち人間にとつて最も困難な解き得ざる謎であることのうちに、始めてキリスト者とは何であるかとの問の意味が存するのである。事實、人間とは何であるかとの問は、その問の直接的答の中に解決を見出さないので、寧ろ、キリスト者とは如何なるものであるかとの一見特殊に見える問に對する答のうち、その解答を見出すであらう。

昔から人間は、その精神生活に於て理性的であることによつて、自らを動物から質的に異なるものとして區別するのを常として來た。人間は動物とは異つて、自己の存在を自覺してゐる。この人間の自覺的實存性によつて、人間は單なる無自覺的存在であるところの動物と異ると見做され勝ちである。併し人間を自覺的存在たらしめる理性や精神と雖も、何等人間を動物から區別すべき根本的差異ではないのではあるまいか。これらのものは潜在的姿では、既に人間以外の動物にも存するのである。たゞ人間が動物と異なる點は、程度の相違に過ぎない。人間は高等動物であるが故に、卓越した知力をもつてゐる。この知力をもつて人間は自然の法則を探求し、然る後この法則を合理的に活用して自然を人間に従屬せしめるに過ぎない。自然辯證法

の中でエンゲルスが人間と爾餘の動物とを區別した本質的差異はこれであつた。かゝる人間意識が近代人の技術的人間 *Homo faber* の基本内容である。道具を用ひる動物である人間は、社會的動物 *Zoon Politikon* としてそれ自體また歴史的発展の一道具に他ならない。かゝる意味で、人間が何であるかは、歴史に於て問はるべき問題となる。

人間の個人的生は、その必然的歸結たる死によつて決定的に限定されましょう。併し、歴史は個人的死によつて決して限界づけられない。故に個人的生の意味は、その生が歴史の各分節にそれぞれ歴史的進展の手段として貢獻することのうちに見出されとも考へられる。かくして技術的人間は歴史の進展の中に自己の存在の意味を見出した。併し、人間によつて意圖される歴史の發展は究極の意味で如何程の意味をもつてゐるか。歴史も亦、人間の存在と同様に始をもち終をもたないであらうか。その出發點から見て發展であるところのものが、その歸着點から見られる時、没落ではあるまいか。何處からか現れ、また何處かに消えゆく砂漠の中なる小川の一水滴にも譬ふべき歴史の中なる人間に一體何の意味があるのか。人間とは如何なるものであるかとの問に對して、私たちは既にそれぞれの立場から部分的な解答を與へられてゐる。併し、不幸にして、それは全き總體的人間 *l'homme tout entier* の規定となつてゐない。



人は自己をより現實的に把握しようとするほど、何か不可解な非現實的なものに突當り、また人間の歴史をより深く探求すれば探求するほど、歴史の根柢に、或る力強い非歴史的なるものを豫感しないであらうか。人間とは何ぞやとの間に對して答へられた此岸的な素朴な規定に満足する者は、そのことによつてたゞ自己の輕佻浮薄さを暴露してゐる。あらゆる人間によつて答へられた人間の規定は、凡て部分的には確に眞理であり得るであらう。併し、人間に對する如何なる規定も亦、それが新なる問題の提出でないやうな決定的解答とはなり得ない。問は答に、答は問に、無限にそれは盡きることなく續くであらう。人間は自然を探求し、その法則を知つてゐる。併し人間は眞の意味で、最も手近かな自己自身を知らない。人間とは一體如何なるものであるかとの間に對する決定的な規定は、内世界的粹のうちでは、また時間的限界内では、決して答へ得べくもないのである。かくして、人間に對する問はその問が眞面目なものである限り、トウルナイゼンがいふやうに、唯一の大なる問、知られざる神への問となつて燃え始める。人間は自己について眞に知るべきことを知つてゐない。それを知るためには、この世界に人々を呼びだし給うたあの始にして終なる永遠なる創造者としての神（イザヤ書四一・五）と對質せしめられて、人間が何であるかを學ばなければならぬ。人間は自己に

對する自問自答によつて、自己を理解し得ない。私たちに對して「汝」と呼びかけ給ふ神に於て、**私たちは人間が如何なる者であるかを知る。**併し、誰がこの神の呼びかけに、應へ得ようか。誰がこの神の御前に立ち得ようか。キリスト者とは、この神の呼びかけに應へて「我ここにあり」といふ者の謂である。従つて人間とは如何なる者であるかとの間に對する眞の答は、キリスト者とは如何なるものであるかとの一見特殊なる問の如く見えるこの間に對する解答のうち根源的に見出される。若しキリスト者がかゝる者でないならば、キリスト者の生活について語ることは、人間の爾餘の一切の事柄について語ると同様に、全く相對的な意味しかもたない。

## 二、人間の被造性

カルヴィンのジュネーヴ教義問答書の最初の頁は「人間生活の究極目的は何處にあるか」との問によつて始つてゐる。さうしてその問に對して「我らを創造し給うた神を識ることにある」との答へが與へられてゐることは周知の事實である。神は人間の中に御自らの榮光をあらはすために、人間を創造し御自らの創造物なるこの世界に人間の場所を定め給うたのである。従つ



て人間は、この創造の秩序に對する正しき理解なしには、自己の存在についての究極的意味を見出し得ない。

併し、私たちは如何にして、この世界が神の創造によるものであることを知り得よう。舊約聖書の卷頭には「元始に神天地を創造し給へり」と錄されてゐる。併し、人間は時間のたゞ中に現存してゐて、その始源を知ることが出来ない。たゞ人間は時間的連続のたゞ中にある者として、科學的知識の霧を通して僅に過去を振り返り見ることが出来るだけである。而も私たちはそこで世界生成の過程についての人間の科學的懐古と舊約聖書の傳統との間に根本的な不一致を見出して混亂せざるを得ない。科學が私たちに語るところを綜合すれば、私たちは世界と人間との生成について次の如く理解することが出来るであらう。原始宇宙は、稀薄な物質を秘めたまゝ微動だにしなかつたが、如何なる偶然によつてであるか、遂にこの均齊の破れる時が來て、宇宙の何處かに攪亂が生じ、この微かな不統一が徐々に傳播して全宇宙に擴がつたのである。かくして今日の宇宙はこの時に誕生し、膨脹し始めた。そして物質の凝集作用によつて渦狀星雲となり、球狀星團、散開星團、連星、恒星と變化して今日の太陽系が現れた。そこから發生した私たちの住むこの地球は、最初は太陽の如く白熱せるガスの塊であつたが、その表面

が次第に冷却してやがて地殻となつた。この地殻上に羊齒植物が繁茂し、原生動物が生棲し始め、プラキオザウルスや龍龍やマストドンや或はマンモスなどの奇怪な前世紀の動物が活躍する時代を経て、猿人ピテカントロプスが地球上に出現したのが今から五十萬年以前であると推定されてゐる。さうしてビルトタウン人、ネアンデルタール人から今日の人類の祖先であるクロマニヨンの出現となつた。この時から今日までの人間の歴史は約二萬五千年である。

一方舊約聖書には、かゝる悠久なる進化の過程を通して人類が地上に出現したものとせず、突然、六日間に神の御手によつて創造されたものゝ如く記されてゐる。一般に今日の科學者が聖書の信憑するに足りない書物であることを語る場合引合に出すのを常とする聖書の箇所は、先づ第一にこの創世記である。併し、神が聖書記者を通して私たちに告知せんとし給ふ事柄は、自然の生成や、歴史の過程ではない。創世記の意味は、私たちの見出し得る事物の領域のうちには存しないのである。それは私たちが自然と呼び歴史と名づける領域以前のもの、それを越えたもの、その背後のもの、その創造的根源を指示する。歴史と自然の中では、人間は最初に最後という言葉をもつてゐる。従つて、ここでは私たちは科學者の言葉に傾聴しなければならぬ。併し、聖書は彼等の知らないものについて告知してゐる。人間が既に認識の外



に喪失して了つた原歴史について、即ちあの永遠的根源について聖書は語るのである。若し、創世記の言葉が、自然と歴史の領域内で語られたものとして受取られるならば、それは單なる神話と選ぶところなく、高々あの古の時代の美 *Pulchritudo antiqua* に過ぎない。併し創世記に於て神が私たちに告知し給ふ世界は、この自然と歴史を越えて存する永遠なるロゴスの王国である。彼處では神のみが最初にして最後の言をもち給ふ。創世記のバラダイスの記事は、彼處を指差してゐる。私たちは此の王国自體については單獨では何事も知り得ずまた語り得ない。輕々しくこのことに關して口を開く者に對して神は「地の基を我が置るたりし時なんぢは何處にありしや、汝もし穎悟あらば言へ」(エフ記三八・四)と咎め給ふであらう。

彼處では——神の思惟、そは同時に神の現實である——神は人間を神の像に似せて創造し給うた。併し、この人間に於ける神の似姿 *imago Dei* をもつて、神人同形説と見做してはならない。神と人間との類似は存在の類似 *analogia entis* ではなくて、寧ろ關係の類似 *analogia relationis* である。このことは、人間が神の言に應答し得る人格的存在者として創造された事を意味する。ボンヘッフフェルは「神が人間に於て神の像を地上に創造し給うたことは、人間が自由であるといふことに於て神に似てゐることを意味する」とその創世記講解の中で語つてゐる

が、人間に於けるこの應答可能性こそ人格の自由であり、神の似姿に外ならない。自由とは人間の性質ではなくして、二つのものゝ間の一つの關係である。かゝる自由に於てだけ人間は神に榮光を歸するに可能なる存在である。神は人間の自由なる人格のうちに御自らの榮光を寫す鏡を見出すことを欲し給うた。これが「我なんぢの指のわざなる天を觀、なんぢの設けたまへる月と星とをみるに、世の人はいかなるものなればこれを聖念にとめ給ふや、人の子はいかなるものなればこれを顧みたまふや」(詩篇八・三・四)との詩篇記者の間に對する神の答である。人間は世界の如く單なる神の榮光の舞臺であるのみではなく、また同時にその擔手である。世界は人間のために創造されたが、それ故にこそ人間は卓越せる意味で、神に仕へるために創造されたのである。

こゝに人間の位置が定位される。即ち人間は天と地との間に、天使と獸との間に立つてゐる。ダーウインやフォイエルバッハが人間について規定してゐるよりもより苛酷に人間の本質について聖書が告げてゐる言葉は、人間が土から造られたといふ事實である。併し同時に人間は神の息吹によつて實存者となつたと告げられてゐる。このことは土と神的息吹との綜合、換言すれば身體と精神の綜合が人間そのものであることを意味する。従つてこの綜合の破れるとこ



ろ、精神と身體との分裂するところでは、最早人間は人間そのものであることをやめる。精神が身體の實存形式であるやうに、身體はまた精神の實存形式である。アダム即ち人間とはかゝる具體的な實在以外の如何なるものでもない。人間が神の子であるといはれるのは、支那に於ける原始信仰の如く人間の祖先が神であるとの妄想に基づいてではなく、寧ろこの神の息吹の故であり、人間が物に過ぎないのは、人間が土から出で來つた故である。而も「物」は決して神からの派生物ではなくして、神によつて無から *ex nihilo* 創造されたものである。従つてこの創造は藝術家や指物師に於けるやうなある與へられた素材によるこの精神的創造とは全く異なる。神が創造者でいまし給ふことは、逆に人間と世界とが神の被造物であることを意味する。この創造者と被造物との限界線は聖である。誰もこの聖線を冒し得ない。あらゆる人間中心的宗教は、その思想に於てこの線を朦朧とせしめることに於て罪を犯してゐる。神が創造者でいまし給ふことは、かく被造物との質的相違を明らかにすると同時に、神が被造物の窮極的保持者であることを示してゐる。神が愛でいまし給ふと言はれてゐるのは、神と被造物との間のこの關聯に於てである。この創造者と被造物との正しい關係が創造の秩序であり、パラダイスに於ける現實である。

創世記に於けるパラダイスとは、今日の墮落せる人間がその享樂的意識によつて、現實の諸矛盾の中で要請せるユートピアではない。人間は人間自身のものでなく、神のものであるとの、創造主なる神の聖なる權利主張に、人間が心から悦んで服従する場所である。その場所に、神の永遠なる祝福は憩ひ、人間の感謝と讚美はつきない。併しこのパラダイスは、この世界の一角に探ねられ、この歴史の中に見出される場所ではない。併しそれかといつて、單なる寓話ではなほさらない。それは私たちが今日自らの眼前に見てゐるこの世界と歴史とがそこから類落して來たところの神の世界、ロゴスの王國である。この王國を觀照することは、一般人間には拒まれてゐる。たゞ私たちがそれを神の言の告知、神の啓示によつてのみ知ることを許されてゐる。従つてトウルナイゼンが彼の説教のうちで告げてゐるやうに、舊約聖書に於けるパラダイスの内容は、神の最初にして最後の言であるイエス・キリストの中に探ねいだされるのである。

神の世界、原歴史は、私たちの時間的な世界と歴史にとつて、始であり同時に終であるものとして永遠である。私たち人間の世界と歴史とは、この神の世界に對して、中間存在であり、中間時代である。それ故、人間的歴史の太古に溯つて、パラダイスを探求し、地球上の或る場



所にパラダイスの痕跡を見出さんとすることは全く意味なきことであるといふべきであらう。原生動物から悠久なる進化の過程を辿つて来た人間の歴史の側から語るならば、パラダイスも人間に於ける神の似姿も、それは未だ實現されず完成されざる神の約束である。この最後の約束を世界と人間とがそこから出で來つた始源として認めるためには「もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顯るゝ物より成らざる」(ヘブル書一・二三)ことを知る信仰が神の賜物として與へられなければならない。

### 三、人間の墮罪

神の創造言によつて非有より有にまで呼び出された儘のアダムを、カルヴィンは人間の起りし原位 *origo* と呼んだ。私たちはその原位について何らの知識をもたない。たゞ人となり給うた神、イエス・キリストの人性に於てそれを學ぶことが出来る。受肉者イエス・キリストは、その人性に關してのみ語られる限り人間の發端としての墮落以前のアダムを髣髴せしめる。たゞ神の被造物であるアダムと、神の獨子でいまし給ふキリストとの間の本質的相異は、アダムは天と地との中間的存在者として墮落の可能性をもつた人性であり、キリストは人となり給う

た神の獨子として何ら墮落の可能性をもち給はない人性であることのうちに見出される。キリストはたゞ父なる神の聖旨に従つて、その榮光の爲にのみひたすら行動し給うた。そのやうにアダムも亦、神の意志に服従して、神の祝福のうちに常に自らの喜びを見出すべきであつた。破壊されざる創造の秩序の下には、一切は善である。

併し、私たちの現存在は、かゝるアダムと何ら關與するところがない。私たちが現に生き且つ動いてゐるこの世界は、約束にみちたパラダイスではなく、最後に死をもつて終焉する世界である。かくして私たちの現存在は墮落せるアダムと直接に關聯づけられてゐる。アダムがかつて聞いた「汝ら神の如くなるべし」(*Eritis sicut Deus!*)との誘惑者の聲を、私たちも亦不斷に聞いてゐる。私たちは科學や哲學や宗教の智慧の實を喰ひ、人間の限界を忘れ自己を神たらしめようとして、神に叛逆し空しいバベルの塔の建設に夢中である。人は世界文化史の中で「汝ら神の如くなるべし」とのナハーシユ(アダムを誘惑した蛇であつて原意は虚榮)の聲を聞きそれに欺かれてゐる。眞摯ならざることのみが私たちと「アダムの墮落」との間に數千年の時間的隔りを置くのであるが、私たちは、自らの現存在を深く問題にし始めるやいなや、墮落せるアダムと自らの連帶性を認めざるを得ないのである。その意味でキルケゴールは「アダムは最



初の人間である。即ち彼は同時に彼自身であると共に人類である」と述べてゐる。

人類の歴史の出発をアダムに見出すことは近代的教養あるものにとつて餘りに幻想的に映じられるかもしれない。併し、人類の現存在そのものが、創世記に於けるアダムの墮落の記事によつて規定されてゐることは否み得ない眞理である。人間の墮落は、單純に倫理的過失や善の缺乏ではない。寧ろそれは神の外に自己を神たらしめようとする人間の神への叛逆、従つて被造物を通じての創造の秩序の破壊である。ルツターの「私たちは善き業に於てさへ罪を犯す」といつたあの甚だしい言葉の意味は、人間が破壊された秩序の中に生きてゐる者であることを認めることによつてだけ理解し得る。聖書に於ける罪とは、かく神に對する叛逆としての自己主張であり、神の秩序からの乖離としての自負である。私たちは、私たち自ら自己のために何等辯護し得ざる者であるにも拘らず、常に自己を辯護し自己の罪を他に轉嫁し、神の恩寵を拒否し自己を主張し続けることによつて、アダムの原罪を身に負うてゐる。私たちはアダムの裔、否アダム自身である。創世記のアダムの墮落の記事は、神に背いて生活してゐる私たちの姿の活き寫しであるともいへやう。寓話に對する如く不眞面目な態度でアダムの墮落の記事を弄んでゐる私たちに神はその指を向け「汝はその人なり」(アッター・ハイシュ)と告げ給ふであらう。

私たちはアダムと共に、神から脱落した。その結果、私たちは永遠の生命の約束からも額落してゐる。「汝は額に汗して食物を食ひ終に土に歸らん。そはその中より汝は取られたればなり、汝は塵なれば塵に歸るべきなり」との神の宣言は、私たちにとつて不可避的な運命となつた。私たちの一切の生の營は、この神の死の宣言によつて限界づけられてゐる。誰一人として、そこから自由である者はない。私たちは凡て自己愛の奴隷となり、他を愛する場合に於てさへ、この羈絆から釋放されてゐない。私たちはかくして神の似像を自己のうちに喪失し、眞の自由から轉落した。神は御自らの恩寵から私たちを突放し給うた。これが私たちが儂の現存在である。そこに於て如何に無神論に花が咲き、神を誹謗するあらゆる言葉が場所を得、神に反する諸の言説が眞理として歡迎されたとしても驚く必要はない。しかし、人間は窮極の意味で神の敵ではない。あらゆる理性よりもより高き神に向つて、人間が理性の僭越と傲慢とによつてあげる叛逆の叫びは、むなしく空中に消去つてゆく。人間が墮落によつて神の如くなつたといふことは正しく事實である。それ故にこそ、人間は神を告訴し自己を主張する。さうして彼の斷罪したる非なる神の屍の側で、人間のたましひの無限の價値を夢みることや「漸進的進化」の思想によつて、自己を宿命的死の限界から解放しようとする。今日の人間のリビドの



中に、これ以外の動機と意圖とが果して見出されるであらうか。原罪の主體は、實にこの神なきことに満足せる人間全體である。人間は自己を「物」として規定することによつて（單なる物は自己を「物」として自覺し得ない故）神の如くなり、或はまた自己の精神を（人間の限界を假想的に越えて）神と同一視する。併し、この神の如く思考し得る人間が、神の如く生きることの最早出来ないといふことのうちに、人間の悲慘、一切の被造物の歎きを越えた人間の悲慘が存するのである。人間の本質はかゝる矛盾に於て、神の呪を擔うてゐる。

バルトによれば罪とは自己の能力で立つことであり、それはまた神をもたぬことを意味する。この罪の中での人間の存在様式は、二つの類型によつて總括されるであらう。第一の類型は、日常生活の快適によつて自己の存在の意義を認めようとする人々のうちに探ねられる。これらの人々は永遠なるものへの諦念によつて、限られた地上の生涯に於てひたすら幸福への追求を目標として生活する。それが個人的なものであるにもせよ團體的なるものであるにもせよ、精神的な或はまた感性的な幸福の意識が、こゝでは決定的な位置を占めてゐる。人間の殆んど大部分はこの存在様式に従つてゐる。第二の形態は、自己の理想の實現によつて自己の存在の意義を認めようとする人々のうちに探ねられる。これらの人々は自己の理想の不滅性を、彼の携は

る藝術の洗練や、科學の進展のうちに求めて、神によつて負はされた死の呪の重荷をそこで紛らせようとする。かくして彼らは彼ら自らの具體的な生命を、抽象的理念の中に消耗さして了ふのである。彼等は、「人、全世界を贏くとも、己が生命を損せば、何の益あらん」（マタイ傳一六・二六）との決定的批判の下に置かれてゐる。私たちはかゝる者として死すべき者、自らの死を自らの上に擔ふ者となつた。併し、この死が神の呪であることによつて、單なる自然的死、あの動物の死と同視されてはならない。聖書の意味する死は、地上的生命の解體、精神と體との分散、人間生命の積極性の對極たるあの消極性を意味しない。然らずして、それは永遠なる神の呪、神の審判を意味する。單なる自然的死が、人間の終であるならば、それは宿命的なる人間にとつて安息である。プロチヌスは、神々は人間を憐み、その肉體を可死的なるものとなしたときへいつてゐるではないか。既に述べた如く人間の罪が單純に道德的過失や缺陷でなく被造物を通しての聖なる創造の秩序の破壊、神への不逞行爲である限り、人間は永遠に罰せられなければならない。人間の擔へる死の呪とは、私たちが死を求むるともこれを見出し得ず、死なんと欲するとも死は逃げざる（ヨハネ黙示録九・六）ところのかの地獄への放棄 *resignant ad infernum pro Dei volante* である。私たちが土に歸するといふことは、たゞ神のこの永遠なる



刑罰の戸口に立つことに過ぎない。

併し、私たちは私たちに期待し給ふこと重きが故に、また私たちに責任を問ひ給ふことも甚しい神の聖なる審判に襟を正すことをしないで、次の如く訊ねないだらうか。神は何故、人間を最初から墮落の可能性なき完き者として創造し給はなかつたのであるか。神は何故、人間を約束を待望むことによつてのみ完成される如き不完全さに於て創造し給うたのであるか。あゝ人よ、なんぢ誰なれば神に言ひ逆ふか。造られしもの、造りたる者に對ひて「なんぢ何ぞ我を新く造りし」と言ふべきか(ロマ書九・二〇)。神が人間をかゝる留保のもとに創造し給うたことは、聖なる神と被造物との間の限界を劃するためであつた。また神が人間を約束を待望むことによつて、墮落の可能性なき完き人間となし給ふことは神の大いなる憐憫であつた。而も人間はこの約束の外に、自己を神たらしめようとした。それは恩寵によつてアダムにまで附與された自由の濫用である。墮落の責任は、神の側になくて徹頭徹尾、全く排他的に人間の側に存する。併しそれにも拘らず私たちは神の聖なる彈効に服することを欲しないで、なほ次の如く自己を辯護しないであらうか。私が地上に生を享けた時に、既に私は墮落の現存在の中にあつた。詩篇記者が「視よわれ邪曲のなかに生まれ、罪にありてわが母われを孕みたりき」(五一・五)と

語つてゐる如く、私は欲せずして、この奸悪なる世界に人となつたのである。而もかゝる責任を私に負はせ全人類の罪の連帶性の中に、私を罰し給ふ神は、あまりに苛酷、不條理な御方ではあるまいか。併し、私たちは自らの理性と感情の矛盾の中でかく問ふ前に、罪の呪から私たちを解放するために、神の御獨子イエス・キリストを救主として人類に與へ給うた神の壓倒的恩寵を想起しなければならぬ。そこで私たちは、このイエス・キリストに於ける大いなる神の恩寵を追求しようともせず、またそれを見出して感謝しようともせずして、依然として人類の罪の連帶性の中に腰をおろして安らうてゐる自己の姿を知つたならば、最早、私たちは敢て厚顔にも再び神に問ふことをなし能はないであらう。

#### 四、墮罪よりの回復

人間は自己の存在の謎に於て、神といふ偉大なる單語に逢遡する。併し、墮罪の現實の中で見出される神は、自己の現状を慰める人間的思想に過ぎない。今日の社會に氾濫せる新興、擬似宗教の對象たる神はいふまでもなく、あらゆる宗教の對象たる神もまたかゝる神である。キリスト教の名の下になされる神に對する信仰に於ても、神の恩寵から突離された現實の中で、



何らの悔改めも回心もなく神が語られ信じられる場所では、神は單なる生活の裝飾物に過ぎない。そこではあらゆる無神論者の饒舌よりもより甚だしい叛逆と罪過とが、眞の神に向つてなされてゐる。かゝる偶像禮拜は人間によつて犯される最後から二番目の罪である。これに較べるならば、新聞紙上に日々あらはれる社會的暗黒面の血腥き犯罪は、神の御前になほ耐へ易きものであらう。人間は墮罪の現實の中にあつて、活ける神を見出し得ないために、手あたり次第偶像の神を拵へた。その限りでは、神が人間を創造したのではなくて、人間が神を創造したのであるとのフォイエルバッハの人間學的命題は正しい。私たちは今日教會に於て語られる聖書の言葉を、私たちの現實とは全く關りなき遠雷の微かなる響の如く聞き流し、聖書の外に私たち固有の社會生活をそれとは何らの關りなしに營んでゐないであらうか。若しさうであるならば、私たちはキリスト教の名に於て、神の恩寵から突離された人々が信仰の對象としてゐるあの空しい偶像にかゝはつてゐるに過ぎないのである。

神と墮落せる人間との關係の回復は、たゞ神と人間との間に成立する宥和によつてのみ可能である。しかし、聖なる神と罪人なる人間との宥和は如何にして可能であるか。人間の回心とその回心に適はしき實りとしての神の律法への服従によつて、人間は神と宥和し得るであらう

か。そこで神の顯はなる意志としての律法が問題となる。モーセはこの神の律法をシナイ山に於て受取つたといはれてゐる、神がモーセに啓示し給うた律法の内容は、教法師の問に答へ給うたイエスの二つの誠命によつて要約されてゐる（マタイ傳二三・三五―三九）。第一は「心を盡し、精神を盡し思を盡して主なる汝の神を愛すべし」であり、第二は「おのれの如く、汝の隣を愛すべし」であつた。併し、私たちは神を愛することの何たるかを、神の律法を通して知つたとしても、果してこれを實行し得る能力をもつてゐるであらうか。私たちは神の聖なる如く自らを聖なるものとなし、神との宥和をかちとり得るであらうか。私たちは墮罪の宿命の中に、依然として身を横へてをり、私たちの本質は飽くまで自己愛 *amor concupiscentia* そのものではないのか。

そこで私たちは神の律法を羅馬法典やザクセン法典と同視して、人間的意味に従つて如何なる行爲をなし、或は如何なる行爲をしてはならないかを指示する法文の如く見做し勝ちである。私たちはかくして嚴肅なる神の律法を、人間的な命令にかへ、恰もそれを社會的規律かの如く誤用するのである。そこでは律法の遵守は始めて人間に可能なる事柄となるであらう。モーセの律法も亦、かゝる意味でユダヤ人に實行可能なる社會法規と化した。「盜むなかれ」との神



の律法的命令が單に隣人の財産を犯すことの禁止に限られてゐて、神の榮光を奪ひ神の所屬を自己の所有に歸する人間一般の罪過を意味しないならば、私たちも亦、この世界にあつて自己の無罪を神の御前に辯護し得るであらう。併しかゝる遁辭が一體神の御前に何を意味しよう。

私たちは生れながらにして自己を主張せんと欲する者であるが故に、律法の内容である神の意志を隠蔽し、それを社會的秩序を維持する人間的手段にかへた。ユダヤ人、わけてもパリサイ人は、かゝる律法の神性剝奪者であつた。彼等はこの事によつて、自己を神の愛顧に價する律法の遵守者と誤り見做した。併し、日常生活の人間的道徳領域にまで引下げられた「律法の業」(εργον νομου)によつては人は、神の律法を充す事は不可能である。そこで私たちはルツタ1の注意に従つて「律法の業」と「律法を充たす」事とを全く異つた事柄として理解しなければならぬ。人間の手に奪取され人間の處理に委ねられた神の律法は最早、そこでは神的内容を喪失してゐる。かゝる人間的事柄と化した律法の遵守によつて神と宥和し得ると思惟し且つ行動することは神への最大の叛逆であり、人間の神に對する最後の罪である。恐らくパウロが自己を「罪人の首」(テモテ前書一・一五)と呼んだのは、今日の教會人が敬虔なる情緒の修辭的誇張としてパウロの口吻を眞似るあの意圖とは全く異つて、彼自らの律法の行のうちに神の恩

寵に反抗せる最も頑強にして執拗なる自己主張を見出したからであらう。律法の遵守によつて神的救を獲得し得ると自負する人間の傲慢の罪に較ぶれば、律法の外なる一般人間のあの棄てられた場所に於ける偶像崇拜の罪は、未だ問題とするに足りないのである。

「我が汝らに教ふる法度と律法を聽きてこれを行へ、さらば汝ら生くべし」(申命記四・一)との神の律法は、眞實に神の律法に突きあたつた者にとつて、眼前に聳え立つ斷崖を意味しないであらうか。神は何故人間にとつて實行不可能なる律法を人間にまで啓示し給うたのであらうか。この問と共に私たちは、律法の眞の理解に一步近づくのである。カルヴァンは律法を鏡に譬へてゐる。恰も鏡が私たちの顔面の汚點や傷痕を示すやうに、律法によつて、私たちは自らの無力と罪惡とを知るのである。現代の私たちがもう一層適切な例を引くならば、律法はまさしく、レントゲン線に譬へ得る。恰も私たちの内臓の中に隠された死に至る病が、レントゲン線によつて、あらはとなるやうに、私たちの罪惡は律法によつて始めてその埋伏處から曳きだされ、私たちにまで明らかとなるのである。そこでだけ人は、自己に都合よきあらゆる他との相對的比較に満足し、自己の善良と優越とを人々の前に誇ることをやめるであらう。私たちは神の律法によつて始めて、神の前に自己の罪を知る。さうして、神の生命から隔絶された自己



の眞の悲慘に目覺める。この悲慘に較ぶれば、人間のあらゆる悲慘はたゞ見せかけの悲慘に過ぎない。この人間の窮極的絶望状態は、決して人間の精神修養や自己鍛練によつては如何ともなし得ない。併し、律法の目的は私たちをかゝる絶望と死線の中に引入れることのうちにはない。神は私たちを眞に満たす爲に、私たちを空しく爲し給ふ。神は私たちに永遠の生命を與へるために、律法に於て死を宣言し給ふ。神の審判はたゞ神の憐憫の中でだけ理解することが出来る。神は私たちの最も傍近くに立ち給ふことを認めしめるために、私たちが神から棄てられ神から遠く隔絶せる者であることを知らせ給ふ。私たちを弾劾する神の律法は、私たちを救贖する神の約束のうちに窮極の意味をもつてゐる。神の恩寵を神の賜物として受けるべく定められた器は、先づ傾けられ、注ぎいだされ、その器固有の悪臭にみちた内容を失ひ、全く空洞とならなければならぬのである。

私たちは單なる人間的絶望や、精神的破産状態から、律法によつて起された空洞を嚴密に區別したいと思ふ。それは單なる絶望ではなくて、新らしき可能性をもつた悔改である。神による人間的可能性の終點は、神的可能性の發端を意味する。それは、神から來るところの「人は能はねど、神には然らず」(マルコ傳一〇・二七)である。人はそこに於て始めて神の約束

のうちに希望の錨を下すことを學ぶであらう。律法の行によつて神と宥和することの不可能に行詰つた者は、同時に神によつて、律法が充たされ、神と人との宥和の路が既に神によつて拓かれてゐることを認めることを許されてゐる。舊約聖書に於けるモーセの十誡は、約束の民に與へられた神の律法の要約であり、新約聖書に於ける山上の垂訓は、私たちがキリスト者に與へられた神の命令の概要である。十誡を社會的律法と習慣の中に、また山上の垂訓を一般道徳律の中に埋没せしめることなく、そのうちに、具體的なる神の要求を読みとり、その要求に良心的に應答しようと努める者は、その實行不可能であることの認識と同時に、この神的要求がそれ自體を越えて指示するものに盲目であることは出来ない。それは律法の終、完成としての十字架に於けるイエス・キリストである。かくして、シナイ山上に於てモーセの聞いた雷鳴の中なる神の聲と、春園なるガリラヤ湖畔の丘で群衆を教へ給うたイエスの聲とに、エルサレム郊外の暗黒なるゴルゴダの丘は相呼應してゐる。墮罪の中にある私たちの負ひ得なかつた神の律法に、イエス・キリストは死に至るまで従順であり給うた。彼は神の律法を遵守し得ない私たちが罪人のために、私たちに代つて、神の律法を充たし給うた。私たちがたゞ價なしに、イエス・キリストの十字架上に於ける贖罪の死に於て、神に赦され、神と宥和する。「われ律法また



預言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず反つて成就せん爲なり。誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一瞥、一畫も廢ることなく、悉く全うせらるべし」(マタイ傳五・一七—一八)と語り給うたイエスの約束は、彼自身の贖罪行爲に於て客觀的に成就した。私たちはかつてマルキオンやグノーシス派の人々がなした如く、律法からの絶縁をもつて、神的救贖の必須條件と考へたり、また今日の自由主義キリスト者の如く、律法の外に全く律法と關りなくキリストの救贖的恩寵を探ねることの空しさを辨へ知らなければならぬ。峻嚴なる神の律法によつて告訴され審判され死の宣告を受けない者が、どうして、イエス・キリストの代償的死によつて與へ給ふ神の宥和の恩寵を分與され得よう。律法による罪の彈劾のたゞ中で、イエス・キリストに於て私たちにまで聞えてくる神の赦免の聲、これが福音である。それ故、律法はこの福音に於て基礎づけられ、福音はこの律法に於て基礎づけられる。福音も律法もともに神の壓倒的なる恩寵である。この恩寵によつてこそ、私たちは神の敵として常に神に背を向けて歩みつゝある墮罪の世界にありながら、神の永遠なる救贖に約束されてゐるのである。

### 五、神と人との宥和

既に宥和の觀點より語らるべき人間の存在については、前章の「墮罪よりの回復」によつて語り盡されてゐる。併し、私たちの不信仰は律法によつて私たちを審判し給ふ神に對する懼を缺き、従つて神の審判からの赦免を意味する「福音」は、何ら新しくして喜ばしき音信として私たちに響いて來ない。私たちは「福音と律法」の前に眠り續け、否、寧ろ最早冷き死骸とさへなつてゐるのではあるまいか。

併し、私たちがたとへ依然として自己の實りなき罪を樂み、全く神に拘束されざる世界に放棄されてゐる「福音と律法」に關與せざる生活を營んでゐる如く見えても、この神的現實は眠れる或は死骸となれる私たちを儼として圍繞してゐる。實際、活ける神の御前には、私たちの活氣に充ちた生活も、さながら眠であり死であるに過ぎない。私たちの生活には何ら窮極の目的がない。麗はしき言辭をもつて偽裝された團體的エゴイズムによつて私たちは踊らされ引摺られてゐる。私たちは商品の如く機械の如く利用され磨滅されて、やがて棄られて了ふのである。若しかゝる犠牲が國家や社會の安寧福祉のために眞に少しでも役立つならば、私た



ちはなほ自ら慰め得るであらう。併し、額に汗して働ける私たちを見て、私たちの文化勞作のバベルの塔上で赤い笑を笑つてゐるのはサタンである。神の聖旨に反せる全般的惡の機構の中で、私たちが部分的に善であるといふことは、どれほど意味をもつてゐるのか。私たちは罪の連帶性の中に閉ぢこめられてゐて、そこから脱れ出ることが出来ない。そこからの逃亡に熱心であればあるだけ、私たちはその羈絆に抑壓されて如何んともし難い自己を知るのである。

私たちは今や神の律法に正面から突あつた場合の人間の現實に、間接に迂路を通つて對してゐる。私たちは罪の羈絆を脱れて、神に歸ることが出来ない。私たちは神の御前にはたゞ罪人、失はれた者である。かくの如く私たちの人間存在は、それが私たちの人間存在である限り、審かれてをり、失はれてゐる。併し、憐憫にみち給ふ神は、私たちをかゝる宿命的狀態から救ふために御獨子イエス・キリストを遣し給うた。神は人間の行爲によつては不可能な一切の救を、人となり給うたキリストに於て成就し給うたのである。彼は罪人なる人間によつて全く實行不可能な神の律法を最も深い意味に於て悉く遵守し、人間的惡に對して毫も妥協し給はなかつた。醜惡なる人間の世界は、眞にして善なるキリストを容れるに耐へ得ない。彼等はキリストを十字架につけ、さうして殺した。神は何故御獨子キリストを暴虐なる人間の手から救ひ給

はないで、野獸の如き人間の蹂躪に委ね給うたのであらうか。神は墮罪の世界の中に悔改めることもなく叛逆の生活を續けてゐる人間を罰し給ふ代りに、罪人の手を通してキリストを呪ひ罰し給うた。「わが神わが神何ぞ我を見棄て給ひし」(マルコ傳一五・三四)との悲痛なるキリストの叫びは、人間の世界から閉め出され、更に父なる神から閉め出され給うて、全く天と地との間に孤獨となり給うたキリストの嘆息である。キリストは神の律法を遵守し、神の命令に死に至るまで従順であり給うた。それ故、神は彼の一擧手一投足に、御自らの悦びを感じ給うたのであるが、而も、神は、私たちの叛逆と罪とを彼に負はせ、彼を呪ひ、彼は全き服従のうちに神と人間との仲保者として贖罪のあの悲惨な死を遂げ給うた。神と律法に突當つて、人間的可能性の夢から目覺め、全く碎かれた魂となつた者、人間の現實のあの暗黒の謎に直面して、人間的誇りを根こそぎにされた者、かゝる空洞とされた人間は、今やイエス・キリストの犠牲的死の現實の前に引出される。かくして、人は彼の死に於て自らの罪が神の御前に赦されてゐることを覺知する。そこに於て私たちは、今なほ取除かれないで残されてゐる私たちの罪と叛逆ともにも拘らず、キリストの上に憩ふ神の祝福がキリストの代償的死の故に、私たちに轉嫁されてゐることを認める。そこで私たちの存在は、罪人としての人間存在ではなく、イエス・キリ



ストの人間存在となるのである。

人間の固有なる如何なる道德的精神的完全さも、その人をキリスト者として価値づけることは出来ない。寧ろキリスト者とは、キリストを主體者として受けた者である(コロサイ書二・六)。キリスト者の生活とは、従つて私たちのうちなるキリストの生活であつて、キリストを師となし、或は友となし、模範とするキリストと並んで獨立した私たちの生活を意味しない。確に人となり給うたイエス・キリストは、弟子達から師と呼ばれ、御自ら弟子達の友であることを言表し給ひ、キリスト者の模範であり給うた。併しそれらはたゞ私たちのうちなる新しき人、キリストのコロナに過ぎない。キリスト者の眞の生活はあの使徒パウロの「我キリストと偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」(ガラテヤ書二・二〇)との告白のうちに明らかにされてゐる。この使徒の告白はダイスマンのなしたやうに、パウロに於けるキリスト密着の神祕主義として説明すべきでない。寧ろ救贖の告知なる神の言と聖靈とに於て私たちの主體者となり給うたキリストである。従つてキリスト者の生活の基調は「我何をなすべきか」との問の中にはなくて、「キリスト何を我ためになし給ひしか」との問の中に存する。如何なる場合も、最初の問は、たゞ最後の問の中にだけその足場を

もつてゐる。キリスト者の生活は、キリストに於ける神の大いなる業 *Heavenly Deed* の告知を聞くか否かによつて立ちまた倒れるのである。

併し、神の言の告知に於て、自己に絶望した者が、キリストに於て希望を見出し、勇躍してキリスト者の生活の門出にたつといふことは確にあり得べきことであるが、一方、そのことに於て一層暗い懷疑の谷に陥入る人々はないであらうか。私たちは、神の言の告知を聞くことによつて、自己のうちに窮極の救なく、たゞイエス・キリストのうちにのみ、その存することを如何にして知ることが出来るのであらうか。私たちはたゞ信仰によつてそれを知る。併し、信仰とはこの場合、律法の行爲や、様々な善き業と對蹠的位置にある人間に於ける心術や心情ではない。それは一般に誤解されてゐるやうな、宗教的感受性や直感でもない。聖書の意味に於ける**信仰とは現實的にもせよ、可能的にもせよ生來の人間が具有せる人間的機能ではないのである**。信仰とはたゞ神の自由なる賜物である。如何なる場合も人間が信仰を自由に處理することは出来ない。たゞ信仰が人間を自由に處理するであらう。そこで人はたゞ「われ信ず、信仰なき我を助け給へ」(マルコ傳九・一四)と言ひ得るのみである。私たちはこの信仰に於て、神の言を聞きわけ、今尙、死の蔭の眞中を歩みながら「キリストとともに神の中に隠れてある」



(コロサイ書三・三) 生命を見ることを許されてゐる。なぜならば、私たちの内なるキリストは、私たちの上なる、私たちの背後なる、また同時に、私たちの彼岸なるキリストである。神の右にいまして私たちのために執成し給ふ私たちの上なるキリスト(ロマ書八・三四)、私たちの罪の代償として死にさうして甦り給うた私たちの背後なるキリスト(ピリピ書二・七、八)、私たちの救贖の終末的目標である私たちの彼岸なるキリスト(ピリピ書三・二一)この客観としてのキリストが御言と聖靈に於て私たちのうちなる主観としてのキリストでいまし給はないならば、私たちの生活は闇である。

私たちは自らの日常生活の妥協にみちた歩みと、キリスト者に適はしくない行爲を悲しまなければならぬ。併し、自らの生活をキリスト者に適はしきものとなさうとする、餘りに眞剣にして眞面目なる直接的願望が、屢々私たちをキリストから隔絶せんとするサタンの陥穽となる事を警戒しようではないか。かゝる努力のために歪んだ私たちの眼は、そこでキリストを見上げないで、自分自身のみを見詰めるものとならないであらうか。かくして私たちの絶望は、最後まで何らの可能性なき自らの絶望に留るのである。神は恐らく禁慾的苦行の中にキリストを忘れて枯れきつた聖者となるよりも、夕食の團樂の中で御馳走に舌鼓をうちながらキリストに

感謝することを忘れない平凡人であることを欲し給ふであらう。ルッターは「救はれる者を、救はれぬ者から區別するものは神の恩寵のみ」と語つてゐるが、私たちキリスト者を非キリスト者から區別するものは、この神の恩寵としてのキリストの眞實である。私たちはバルトがキリスト者を定義する根本前提として「我らの中なるキリスト」(Christus in me)に就いて語つてゐることに特に注目したい。この私たちのうちなるキリストとは、聖書と教會を通して聖靈に於て私たちを支配し、私たちのうちに永遠の嗣業に至る業を始め給うたキリストである。この私たちの主観となり給うたキリストこそ、私たちに於ける新しき人である。キリスト者の生活とは、神の側から言はれるならばこの新しき人を、主體者とせる私たちの生活であつて、それ以上でもそれ以下でも決してない。

## 六、義認と聖化

神はキリストの十字架の死に於て、即ち唯一回的な繰返し得ない贖罪の業に於て、罪人なる私たちに無罪の宣告を與へ給うた。神は墮罪の世界のうちにある私たちのために一切を遂行し給うた。それ故、彼に身を委ね、恰も流のうちの一滴の水の如く彼のうちにあつて共に流れて



ゆけばよいと考へられないであらうか。そこでは最早、如何なる質疑も律法も必要でない。肉や心はその都度々々に欲する儘に勝手放題の生活をなすつゝ、神の救の業に期待することが、最も強い信仰を意味するときへ見做される。實際神が私たちの爲に一切をなし給うたのに、再び私たちが何事かをしなければならぬと考へることは、神御自身の救の業に對して信頼なき態度ではあるまいか。かくして私たちは無律法者となり、無爲なる人間として、教會のあらゆる束縛から自由であることを以て、信仰者の理想的状態であるときへ考へるやうになる（無教會主義）。私たちは確に、神によつて罪人でありながら義と認められた。私たちが救贖に與り得るのは私たちの行爲によつてではなくて、たゞ神の恩寵による。併し、義と認められた私たちは罪人はなほ時間の中にその罪を廢棄されずに生活してゐる。若し私たちが自らの時間の中なる生活を、神の永遠なる憐憫の故に不問に付し得ると考へてゐるならば、それは人間の論理として神の業を理解してゐるのであつて、決して神の恩寵を信仰に於て把握してゐるのではない。併し、他面、私たちは次の如く考へないであらうか。神は私たちのために大いなる救贖の業をイエス・キリストに於て成就し給うた。それ故、今や私たちの側から神のこの恩寵に應答して何事かを企圖しなければならぬ。かく私たちは餘りに輕率に神の行爲と私たちの行爲とを

等邊的に計量する。こゝでは、私たちは提出された神の恩寵なる商品に對して私たちの代價を支拂ふ可能性をもつてゐる。神と私たちとの關係は、商賣に於ける取引關係に外ならない。併し、私たちはもともと、神の恩寵を買ひ取るに足る金貨を持させてゐなかつたのではないか。私たちの財布にはたゞ襤褸だけが塞つてゐたのではないか。私たちは神の御前に哀れなる乞食ではなかつたのか。それにいつの間、神の永遠なる業を、買ひ取ることの出来るやうな富豪となつたのであるか。貧しき漁夫のお上さんから富める女王になつたお伽噺の女主人のやうに、私たちは夢を見てゐる。かゝる尊大なる夢は、神の御前に耐へ難き惡臭である。パリサイ人がかつてこのやうな夢を見てゐた。中世のカトリック教會も亦、おほむねこの黄金の夢を神の恩寵に對立させた。現代のプロテスタントは、それならばこの眞夏の夜の夢から全く目覺め切つてゐるか。否、イエス・キリストの無比なる恩寵に對立させて、私たちは自己の理想や隣人愛や、道徳的純潔を如何に高く評價してゐることであらう。私たちは神の恩寵に對して等邊的な應答をなし得ない者であることを先づ認めなければならぬ。キリストは私たちのためにその生命をさへ棄て給うた。併し、私たちは、キリストのために何を棄てたか。キリストは私たちのために御自らを犠牲とし給うた。一切を棄て、キリストへ！ かゝる標語を私たちは、



そこへの教會の祈會に於て耳にした。併し、私たちは未だ一度もかゝる言葉を文字通り實行したキリスト者を見たことがない。私たちは至る處の教會に於て、隣人愛と道德的善行とが讚美されるのを聞いた。併し、それを徹底的に實踐躬行する人は何處にも見出されなかつた。私たちはキリストの死に於て神の恩寵について知るところのあつた「今」と、それを知らなかつた「かつて」と全く本質的に相違しない自己を見出してゐないであらうか。回心後の今もかつてと同じやうに、自己追求と自己實現の生活に餘念なき有様ではないであらうか。私たちは今もなほ自己の内心の聲に従つて行動してゐる。併し、一度でも神の聲をきき、内心の聲に逆うて、内的要求を神の要求によつて犠牲としたことがあつたであらうか。私たちは神に對して常に罪人である。私たちは打算を越えて神に服従し得ない。

然らば、墮罪の世界に幽囚された私たちは、時間の中で自己の聖化を問題とすることは全く不可能であり、意味なきことであるのであらうか。聖書は「否」と告げる。聖書は神の歴史的救の恩寵について告知すると同時に、私たちがこの恩寵に決斷をもつて應答せんことを勧告する(ロマ書二・一二)。併し、聖書の要求する應答性は、神の恩寵に並んだ人間の獨立的行動ではない。それはたゞキリストの死と復活とに於て啓示された神の恩寵の、人間に於ける反映

であり反射であり反響であるに過ぎない。従つて聖書に於ける應答の勧告には、必ず神の恩寵の告知が先行してゐる。こゝに於て神の律法は廢棄さるべき人間の律法ではなくして、成就さるべきキリストの律法(ガラテヤ書六・二)となるのである。ルッターの餘りに強き局部的主張に幻惑され、それらの思想の内容を正しく理解し得ない近代キリスト者が、キリストの律法を無視してその外に立つた瞬間から、現代キリスト教のとめどなき墮落は發してゐる。私たちが眞にキリストの恩寵の下にあるならば、私たちはまた同時にキリストの律法の下にあるであらう。私たちが眞に神の恩寵を知るならば、その恩寵に應答してキリストの律法を負はざるを得ないであらう。では、既に拒否された神の恩寵に對應する等邊的な人間の應答性と、こゝに語られてゐる信仰的應答性との間には如何なる具體的差異が存するのであらうか。この間はキリスト者の聖化に關する問題に私たちを導くのである。

私たちが信仰的應答に於てなし得ることは何であらうか。神の恩寵の私たちに於ける反映、反射、反響とは具體的には如何なるものであらうか。このことを問ふ前に、神の聖前に私たちが現存在が何であるかを知らなければならぬ。私たちが如何に神に自己を捧げることが拒み、自己を出しおしみて、自己實現や、自己充足のために奔走してゐるとしても、私たちの



現存在は神の聖前に既に犠牲として捧げられた生贄である。意識するにもせよ、意識せざるにもせよ、墮罪の下なる全人間には既に死が宣告されてゐる。私たちが神の意志を考慮に入れることゝ、神に拘束されて生活することによつて、實生活上の損失を招いたり、精神的打撃を受けたり、心の平和を攪亂されたりすることを恐れて、神に背を向けて心密かに自己の利害に拘泥してゐる時、私たちはそこでも、神の永遠なる「否定」の下に置かれてゐる。神から乖離した人間の業績が最高の讚美をもつて崇められる聲の響く場所には、また被造物の最深の悲嘆が反響してゐる。人間の業績が偉大であれば偉大であるだけ、それだけその損失も亦大である。人間の光は闇に、人間の生は死に根據づけられてゐる故、最後に無に歸することのない人間の業績は何處にもない。

世界と歴史の窮極的虚無に於て、人間の現存在を把握しようとするシエスタッフ的人間観ではなく、世界と歴史との窮極的審判としてのイエス・キリストの十字架に於て、人間の現存在を見た者は、神に反抗して自己の小さき利害に拘泥することの謂れなきことを認めるであらう。この認識と同時に、恰も殺人に用ひてゐた斧を改心した強盜が森林の開墾に役立てるやうに、自らの地上の生命と所有と能力とをたゞ神の榮光のためにのみ活し用ひ得たならば、私たちは

充ち足れる人間である。併し、嚴密な意味で、肉である人間は、時間的には、このことは不可能である。私たちの靈は神の榮光のために生きることが欲するであらう。併し、私たちの肉は自己の慾望と満足のために生きることが欲してゐる。靈とは神に對する *Corum Deo* 人間であり、肉とは自己に對する *Corum se* 人間である。キリスト者は地上の生涯の終るまで、この靈と肉との二律背反の中に、相對的生活を續ける。若しもかゝる戦から解放されて、この世の人々が嬉々として肉の生活を矛盾なく楽しんでゐるやうに、私たちも亦、この地上で靈の生活を享受し得たならば、如何に祝福されたことであらう。そこでは既に信仰の蹟も終つてゐる。併し神はそれを私たちに許し給はない。神の永遠なる國に於て私たちを待つてゐるこの祝福は、なほ私たちが戦に充ちた地上の生涯を終つて、彼處に旅立つまで、私たちに信仰の試験として保留されてゐる。私たちは、神に反抗しての私たちの存在が、既にイエス・キリストとともに神の審判の下に死として宣告されてゐるのを見た。同時に、私たちは彼に於て神にその罪を赦され永遠の嗣業に與かる者とされてゐる。この場所で、私たちのなし得ることは何であるか。キリストの恩寵に應へて、肉の執拗なる要求と戦ひ、キリストの律法に服従せんとして努力することである。併し、かゝる服従への努力は最早神の恩寵への人間の等邊的應答であり得よう



管がない。私たちは、かゝる服従に於て極微も自己に誇を歸することが出来ない。ルッターの語つたやうに、私たちはたゞ、かゝる努力の故に、羞らひのうちに生活する。私たちが地上生活に於てなし得る凡ては、キリストの律法への服従のために不従順なる自己の本性と戦ふことである。このことによつて私たちは期せずして、神の支配に對立せるこの世界の生命衝動の支配に對して抗議する者となる。私たちの教會生活は、世界に向つてのこの抗議以上の何ものでもあり得よう。一人のキリスト者が、あらゆる障害を乗り越えて教會の集會を嚴守するの、墮罪の世界へのこの抗議を意味する。そこで私たちは、かの神的事實、キリストの死と復活によつて齎らされる神の恩寵は、太陽系中の一遊星である地球といふこの巨大なる工場と、そこに於て生産されるあらゆる生産物の總和よりも重、且つ大であることを告白する。キリスト者の生活は、このことの告白と證に於て終始されるのである。

従つてキリスト者の聖化は、地上に於て天國の生活を營むことではなく、(實踐の必要な夢想家のみが、このことの可能を空想してゐる!) 寧ろバルト的用語をもつてすれば、地上に於て天國の生活の示威運動 *Demonstration* に携はることである。かゝる者としてキリスト者は、教會にまで召されてゐる。

## 七、人間存在の目的

既にキリスト者の生活が如何なるものであるかに就いて私たちは學んで來た。未だ神の國の平和の中に救贖された者としてゞはなく、たゞ旅人、宿れる者として(ペテロ前書二・一二)この地上を歩んでゐる自らを、この朽ちゆく地上を唯一の住家となし安住の地として生活してゐる人々と比較する時、私たちキリスト者は如何に悲慘な存在者であることであらう。私たちは今途中にゐる。或時は旅人の常として、未知なる國への好奇心によつて、私たちの胸が高鳴り、私たちの信仰的體驗の喜悅は、私たちの足を輕々と前へ前へと運ばせることもあつた。併し、また時として、私たちは懷疑の迷路に踏み込み、旅路に疲れて不安と焦燥のうちに將來の見透しの全くつかない時もあつた。自己の體で立ち、自己の足で歩んでゐるものは、中途にして倒れるであらう。私たちは自己の信仰的體驗の光と、影とを越えて、彼方を見る。私たちは自らの能力では彼處に歩寄ることの出来ない者であり、たゞキリストの導によつてのみ彼處に到達する者であることを知ることによつて、常に自らの高揚と絶望とをキリストに委ねて進む。ベンゲルは「希望は所有することである」 *Spes erit res* と語つてゐるが、この彼方を見ること



と、進むことによつて、私たちは既に神の榮光の秩序をその希望の中にもつてゐるのである。やがて私たちにまで實現する神の榮光の秩序は、私たちが再び其處から墮ちることなき創造の秩序の回復である。恩寵の秩序の下なる私たち、いはゞなほ途上にある私たちの如く、彼處では最早、私たちは罪人にして義なる者ではなく、不虔なる者にして聖なる者でもない。かゝる矛盾は止揚され、キリストの復活の體に與る者となる。其處では神の律法は最早私たちにとつて、かつての如き束縛ではなく、キリストにとつて常にさうであつたやうに、私たちにとつても亦、神の榮光の輝として甘美なる喜びとなるであらう（詩篇一九・一〇）。私たちは最早、神の御顔の光を避けて、あそこ、こゝに、アダムの如く逃げ隠れる必要はない。「視よ、われ一切のものを新にするなり」（ヨハネ黙示録二一・五）との神の創造の言によつて、一切の被造物が新しき創造とされる時、私たちは燈火や太陽の如き造られたる光ではなくして、神の造られざる光に照らされる者となる。彼處には最早、死も離別も悲歎も苦痛もない。神の祝福の中で、一切の被造物の感謝と讚美との聲は反響する。墮罪の世界より救贖された私たちは、その精神と身體とを更新され、その全き神的統一なる永遠の生命を與へられる。私たちは彼處で自由なる人格として、神への應答的存在となり、墮罪によつて喪失した神の似姿を再び恢復する。人

間の反復常なき文化への空しき努力、相對的な歴史の危機に於て繰返される、熱情と武器とをもつて敢行する社會的革新運動、これらのものもこの神による新しき創造に比較される時、たゞ兒戯に過ぎない。人間の手によつて建設されたものは、やがてまた人間の手によつて破壊されるであらう。それにも拘らず、罪の下なる人間が、常に影に驅らるゝ者の如く、繰返しかゝる兒戯に血眼になつて熱中せざるを得ないことは、再び暮れることなき神の榮光の王國が、人間存在の窮極目的として實在することの否み難き徴である。



昭和十二年二月二十五日印刷  
昭和十二年二月二十八日發行

上原パンフレット 第六篇

キリスト者の生活

【定價二十錢】

著者 赤岩 榮  
東京市澁谷區代々木上原町一二九五

發行者 長崎 次郎  
東京市牛込區早稻田鶴卷町四七一

印刷者 横澤 藤盛  
印刷所 明正社印刷所  
東京市牛込區早稻田鶴卷町三七一

發行所 長崎書店  
東京市牛込區早稻田鶴卷町四七一  
振替東京七一八八六番



**言**

月刊誌 発行日 毎月一日  
 定價一部五錢 半ヶ年三十錢  
 一ヶ年六十錢

主筆 赤岩 榮

内容

- 一、講壇
  - 二、聖書研究
  - 三、信仰對話篇
  - 四、其他
- (二錢切手封入御申込みの方には見本進呈)

赤岩榮 説教集

**死と生の所屬**

定價 一圓  
 送料 十二錢

發行所

東京市澁谷區代々木上原町一二九五  
 上原エクレシア  
 振替 東京六七三九九番

上原パンフレット

— 定價廿錢 送料二錢 —

第一篇 赤岩 榮著

聖書に於ける神の言

第二篇

隠れていました給ふ神

第三篇

神の言イエス・キリストとしての

第四篇

聖靈

第五篇

イエス・キリストの教會

長崎書店刊行書目

高倉徳太郎著	福音的基督教	定價 〇、一〇 送料 〇、〇〇	東京 銀座
同 著	恩寵と眞實	定價 〇、一五 送料 〇、二〇	京 市口
同 著	恩寵と召命	近 刊	市 牛座
同 著	基督教世界觀	定價 〇、一〇 送料 〇、〇〇	牛 座
同 著	聖書の宗敎	定價 〇、〇〇 送料 〇、〇〇	込 東
同 著	神の愛と神への愛	定價 〇、〇五 送料 〇、〇六	區 京
高倉徳太郎	(I) 祈禱の戦場	定價 〇、〇五 送料 〇、〇六	早 七
説教集	(II) 祈禱の戦場	定價 〇、〇五 送料 〇、〇六	稻 一
同 著	(III) 決斷的信仰	定價 〇、〇五 送料 〇、〇六	田 八
征矢野晃雄著	信仰と道徳	定價 〇、一〇 送料 〇、四〇	鶴 八
同 著	聖アウグスチヌスの研究	定價 〇、一五 送料 〇、四〇	卷 六
日本神學校編	基督教文獻假目録	定價 〇、〇八 送料 〇、六〇	町 番







長崎書店刊行書目

(5) 文學・感想・小品	(3) 說教及び神學論文	(1) パウロ研究	兒全 童生詩文集	武藏野歌會	同 著 療養日日の力	村尾圭介著 療養夜話	川添繁郎著 病床の樂園	龍田研一編著 殉教の旗	紅松雄二著 小猫の感涙
(4) 時事評論及び史論	(2) 耶蘇及び福音書研究	——	星	東雲のまぶ	影	た	送價 〇〇、〇三、〇六〇	送價 〇〇、〇一、〇八〇	送價 〇〇、〇一、〇八〇

東 京 香 港 報 振 代 理 店 長 崎 書 店 刊 行 書 目

長崎書店刊行書目

由木直方共譯者	松尾野川共譯者	宮本武之助譯者	菅ルナ吉譯者	藤田孫太郎譯者	同	同	松尾ト相譯者	桑田秀延譯者	角田桂嶽譯者	齊藤勇譯者
巴斯カル「パンセ」序說	聖パウロの神學思想	基督教世界觀と哲學的世界觀	神と人	聖書の世界觀	教會と文化	福音主義的教會の危念	義認と聖化	基督教の中心問題	基督教とは何ぞや	聖パウロ
送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇	送價 〇〇、〇一、〇〇〇

東 京 香 港 報 振 代 理 店 長 崎 書 店 刊 行 書 目







終